集英社版 世界の文学 30

バルガス＝ジョサ

ラ・カテドラルでの対話

桑名一博＝訳

集英社

CONVERSACIÓN EN LA CATEDRAL
by Mario Vargas Llosa
Copyright © 1969 Agencia Literaria Carmen Balcells, Barcelona
Japanese translation rights arranged through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

© 1979 Shueisha

集英社版世界の文学30
バルガス＝ジョサ
一九七八年一二月二〇日印刷
一九七九年一月二〇日発行
訳者　桑名一博
編集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三八―二七八一
印刷所　中央精版印刷株式会社
大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています
0397-122030-3041

目次

ラ・カテドラルでの対話　桑名一博訳　3
第Ⅰ部　5
第Ⅱ部　187
第Ⅲ部　309
第Ⅳ部　437
解説　桑名一博　561
著作年表　568

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ラ・カテドラルでの対話

ルイス・ロアイサとアベラルド・オケンドに

《小説が国家の私的な歴史である以上、真の小説家となるためには、社会生活のすべてをくまなく探求しておくことが必要である》

バルザック『結婚生活の悲惨』

第Ⅰ部

1

サンティアーゴは「ラ・クロニカ」社の入口から不興げにタクナ通りを眺めやる。自動車、色褪せた不揃いな建物、霧のなかに浮かぶネオンサインの骸骨、灰色の正午。ペルーはどの時点で駄目になってしまったのだろう？　ウィルソンのところの信号でとまっている車のあいだを、新聞売り子たちが夕刊と呼ばわりながら右往左往している。サンティアーゴはコルメーナ通りの方に向かってゆっくりと歩き出す。両手をポケットに突っこみ頭をうなだれながら、やはりプラサ・サン・マルティンの方に向かう歩行者たちに囲まれながら進んで行く。彼はペルーみたいだった、彼、サバリータは、どこかの時点で駄目になってしまっていた。彼は考える、何のことを？　クリジョン・ホテルの正面で一匹の犬が彼の足をなめにくる、狂犬病をうつすなよ、あっちに行け。ペルーはすっかり駄目になってしまった、彼は考える、カルリートスも駄目になってしまった、誰も彼もみんな駄目になってしまった。彼は考える、解決の途はない、と。ミラフローレス方面行きのタクシー乗り場に長い列ができているのを見て、サンティアーゴは広場を横切る、するとそこにノルビンがいて、やあ、どうだい。バー・セラのテーブルにつくと、ノルビンはチルカーノ（魚、オレンジ、玉葱、唐がらしで作るポタージュ）にとりかかり、靴を磨かせながら、坐れよ、サバリータ、と言って彼に酒をすすめる。ノルビンがまだ酔っぱらっていないようだったので、サンティアーゴは腰をおろし、靴磨きに彼の靴も磨くようにと言いつける。かしこまりました、大将、今すぐやりますから、大将、鏡のようにしてさしあげますから、大将。

「ずいぶん久しぶりだな、論説委員」とノルビンが言う。

「地方版よりも論説の方がいいかね？」

「仕事は楽だね」サンティアーゴは肩をすぼめ、冷たい水を注文する、ことによるとあの日だったのかも知れないな、社長が彼を呼んで、君はオルガンビデの後釜に坐りたくはないかね、サバリータ？　君は大学に通ってたことがあるんだから、その気になれば論説が書けるんじゃないかな、サバリータ？　彼は考える、俺はあそこで駄目になってしまったんだな。「早く来て、テーマを与えられ、鼻をつまめば、二、三時間後には準備完了、鎖を引けば、それでおしまいさ」

「俺なら世界じゅうの金を積まれたって論説なんか書かな

いね」とノルビンが言う。「君はニュースから離れちまってるけど、新聞というのはニュースなんだぜ、サバリータ、本当だよ。俺は警察回りで一生を終えるつもりさ。ところで、カルリートスは死んじまったのかい？」

「まだ病院にいるけど、近いうちに退院になるらしい」とサンティアーゴは言う。「彼は今度こそ飲むのはやめると誓っているよ」

「奴がある晩ベッドに入ろうとしたとき、ゴキブリやクモを見たというのは本当かい？」とノルビンが訊く。

「シーツを持ち上げると、何千というクモやネズミが襲いかかってきたんだ」とサンティアーゴは言う。「それで奴は、大声をあげながら裸のまま通りへとび出したんだ」

ノルビンは声をあげて笑うがサンティアーゴは眼を閉じる、チョリージョス地区の家々は鉄格子のついた立方体、地震でひびの入った洞窟であり、その内部にはガラクタ物が散らばり、静脈瘤の浮き立つ足にスリッパをひっかけた腐りかけの汚らしい老婆たちがうごめいている。そうした立方体のあいだを小さな人影が駆け抜け、その悲鳴が油のような夜明けを震わせると、彼をつけ回すアリやサソリたちがいきり立つ。青い悪魔の姿をした緩慢な死と向き合うために、彼は考える、奴はアルコールに救いを求めたわけだ、それでよかったんだ、カルリートス、誰もができるだけのことをしてペルーから身を守らなければならないのだから。

「俺も思いがけないときに虫を見ることになるだろうな」ノルビンはチルカーノを物珍しそうに眺め、中途半端に頬笑む。「だけどな、サバリータ、酒を飲まない記者なんていないぜ。飲むお陰でインスピレーションが湧くのさ、本当の話」

靴みがきはノルビンを終え、今は口笛を吹きながらサンティアーゴの靴に靴墨を塗っている。「ウルティマ・オラ」の方はどんな具合だい？ あの悪党連中は何と言っている？ お前さんのことを恩知らずだとぶつぶつ言ってるよ、サバリータ、前みたいに、いつか連中のところに寄ってやれよ。話は変わるけど、サバリータ、君にはいま暇な時間が一杯あるわけだが、よそでアルバイトでもしてるのかい？

「本を読んで昼寝をしているだけだ」とサンティアーゴは言う。「たぶん、また法学部に入りなおすことになるだろうね」

「ニュースから遠ざかったと思ったら、もう学位を欲しがってるのか」ノルビンは悲しそうに彼を見つめる。「論説というのは行きどまりだからな。君はそのうち弁護士になり、ジャーナリズムから離れるだろうね。ブルジョワになった君の姿がもう眼に見えるよ」

「ぼくも三十歳になったところなのでね」とサンティアーゴは言う。「ブルジョワになるには遅すぎるよ」

「三十かっきりなのかい？」ノルビンは考えこむ。「俺は

三十六だけど、君の父親みたいに思えるな。三面記事っていうのは本当の話、人をくたくたにさせるぜ」
男っぽい顔、バー・セラのテーブルにそそがれる濁った打ちのめされた眼、灰皿やジョッキに向かって伸びる手。ここにいる連中はなんて醜悪なんだろう、カルリートスが言ってた通りだ。彼は考える、今日はどうしたんだろう？靴磨きがテーブルのあいだで荒い息をしている二匹の犬を手で追い払う。
「『ラ・クロニカ』の対狂犬病のキャンペーンはいつまで続くんだい？」とノルビンが訊く。「もう、うんざりしてきたぜ、今朝もまた一頁さいてやがった」
「狂犬病に関する論説はみんなぼくが書いたんだ」とサンティアーゴは言う。「なんて言ったって、キューバやヴェトナムについて書くよりも気が楽だからね。さてと、もう行列がなくなったからぼくはタクシーに乗りに行くよ」
「昼食を付き合えよ、俺がおごるから」とノルビンが言う。「女房のことなんか気にするな、サバリータ。懐しき良き時代を呼び戻そうじゃあないか」
熱いスズキに冷やしたビール、バッホ・エル・ブエンテ区の〈リンコンシート・カハマルキーノ〉、鼻汗みたいな色をした岩のあいだを流れるリマク河の模糊（もこ）とした水の眺め、土色をしたハイチのコーヒー、ミルトンのところでの賭事、ノルビンの家のチルカーノとシャワー、いつも値切ってくれるベセリータと淫売屋で捧げた真夜中の讃美、それに酸っぱい眠りと、めまいと、夜明けに対する疑い。懐しき良き時代、あの頃だったのかも知れないな。
「アナがエビの煮こみを作ったのでね、そいつを食いそこねたくないんだ」とサンティアーゴは言う。「ほかの日にするよ」
「お前さんは女房が怖（こわ）いんだな」とノルビンが言う。「まったく、お前はすっかり駄目になってしまったな」
君が考えているような理由からじゃあないんだ、兄弟。ノルビンがビールと靴磨きの代金を払うと言い張ってから、二人は握手する。サンティアーゴはタクシー乗り場に戻る、彼が乗った車はシボレーで、ラジオをつけている、喉（のど）の乾きにはインカ・コカコーラが一番、その後でワルツ、川、山峡、ヘスス・バスケスの物慣れた声、それがわがペルーだった。市内はまだ渋滞していたが、レプブリカやアレキパはすいており、車は早く走ることができる、再びワルツがかかる、リマの女たちは昔ながらの心をしていた。どうしてペルーのワルツっていうのは、どいつもこいつもこんなに馬鹿げてるんだろう？　彼は考える、今日はどうしたんだろうな？　サンティアーゴはおとがいを胸に当て、半ば閉じた両眼で腹部をうかがうように見ている。おや、サバリータ、お前は坐ると背広がそんなにだぶつくのかい。あれは彼が初めてビールを飲んだ時だったかな？　十五年、それとも二十年前？　四週間のあいだ母親やテテと顔を合わせなかったっけ。ポパイが建築家になるなんて、いった

い誰に予想できただろう、サバリータ、お前がリマの犬を敵視した論説を書くようになるなんて？　彼は考える、もうじき太鼓腹になるな、彼はサウナに行き、テラサスでテニスをするだろう、六カ月もすれば脂肪が燃焼し、また十五歳の頃みたいにすべすべしたお腹になるだろう。動き回り、無気力を吹きとばし、ふるい立つこと。彼は考える、スポーツ、それが解決法だ。もうミラフローレス公園だな、ケブラーダ、マレコン、運転手さん、ベナビデスの角で。彼は車をおり、両手をポケットに突っこんで頭をうなだれながら、ポルタの方に向かって歩く、今日はどうしたんだろうな？　空は依然として雲におおわれており、あたりはなおいっそう薄暗く、細かい雨が降り始めている。皮膚に蚊の長い足とクモの巣の愛撫。そればかりか、よりひそやかな、もっと不快な感覚。この国じゃ雨までが駄目になってしまっている。彼は考える、少なくともどしゃ降りがあればなあ。コリーナでは、モンテカルロでは、マルサーノでは何を上映してるだろうか？　彼は昼食をとり、『対位法』を一章読むだろう、するとそれはけだるい気分をもたらし、彼を両手にかかえて午睡のねばっこい眠りまで運んでくれるだろう、もしかすると、『リフィフィ』みたいな探偵物か、『リオ・グランデ』みたいな西部劇をやってるかも知れないな。だけど、アナは新聞でチェックしておいたお涙頂戴物の方がいいと言うだろう、今日はどうしたんだろう？　彼は考える、検閲がメキシコ映画の上映を禁止してくれればアナと喧嘩することも少なくなるんだが。そして映画の後は？　二人でマレコン通りをぶらつき、ネコチェア公園のセメントの日除けの下で、暗闇のなかで、咆哮する海に耳を傾けながら煙草を喫い、手をつなぎ合ってキンタの化け物小屋に帰り、おおいに愛を闘わせ、おおいに愛を論じ、そして欠伸まじりでハックスリーを読むだろう。二つの部屋は煙と油の臭いに満たされるだろう、ねえ、とてもお腹が空いてたの？　明け方の目覚まし時計、シャワーの冷たい水、タクシー、勤め人たちにはさまれてのコルメーナ通りの歩行、編集長の声、サバリータ、君は銀行スト、漁業危機、イスラエル問題のどれにするかね？　たぶん、少し頑張って学位を取った方がいいかも知れないな。彼は考える、後退すること。サンティアーゴはオレンジ色のざらざらした壁を、赤い屋根を、妖精村の家々の黒い鉄柵がついた窓を見る。アパートのドアが開いているのに、駄犬のバトゥケが嬉しそうに騒々しく跳びだしてこない。君は中国人のところに行くのに、なんだって家を開け放しておくんだい？　だが、そうじゃあなかった、アナはそこにいる、どうしたんだい？　彼女は腫れぼったい眼をして涙ぐみ、髪をふり乱している。バトゥケを連れて行かれちゃったの。

「私の手からもぎとってったのよ」アナがすすり泣く。「いやらしい黒人たちが。バトゥケをトラックに入れちゃったの、連中があの犬を盗んじゃったの、盗んじゃったのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

サンティアーゴはアナのこめかみに口づけする、まあ、落着けよ、彼女の顔を愛撫し、どんなふうにして？　肩に手をそえて家の方に連れて行きながら、泣くなよ、お馬鹿さん。
「わたしが『ラ・クロニカ』に電話をしたのに、あなたはいなかったし」アナはべそをかく。「盗賊だわ、犯罪者みたいな顔をした黒人たちなの。わたしが鎖も何もかもつけて連れていたのに。私からもぎとって、トラックに入れ、奪って行ったのよ」
「昼食を食べたら野犬収容所に貰い受けに行ってくるよ」サンティアーゴはまた彼女に口づけする。「別に心配することはないから、そんなにめそめそするなよ」
「あの犬ときたら足をばたつかせたり、尻尾を振ったりして」アナがエプロンで眼をふき、溜め息をつく。「分かっているみたいだったわ。本当に、かわいそうで」
「連中は君の手から奪い取ったのかい？」とサンティアーゴが訊く。「なんていう奴らだ、ひとつ、こねてやろう」
サンティアーゴは椅子の上に投げかけておいた背広を手にとり、ドアの方に一歩踏みだすが、アナが彼をさえぎる、その前に急いで昼食をとらなくちゃあ。その声は柔らかく、彼女は両頬に笑窪を浮かべ、悲しそうな眼をし、青白い顔をしている。
「スープはもうさめちゃったかも知れないわ」アナが微笑し、彼女の両唇が震える。「あの出来事のせいでわたしは他のことをみんな忘れちゃったんですもの。バトゥケったら、本当にかわいそう」
彼等は別荘村の中庭に面した窓の近くに置かれた小さなテーブルで、言葉を交わさずに昼食を食べる、テラサスのテニスコートみたいな煉瓦色をした土、道沿いにゼラニウムの鉢が並ぶ曲りくねった砂利の小道。スープはさめており、脂の薄い膜が皿の縁を染め、エビがブリキみたいに見える。彼女はお酢を買いにサン・マルティンの中国人の店に行く途中だった、突然、一台のトラックがアナの脇でブレーキをかけ、犯罪者みたいな顔をした二人の黒人が、最低のごろつきどもが、車からおりてきて、一人が彼女を突きとばし、もう一人が鎖をひったくると、彼女には何が何だか分からないうちに、もうバトゥケを檻に入れて立ち去ってしまったのだった。かわいそうな、かわいそうなワンちゃん。サンティアーゴが立ちあがる。あのひどい仕打ちのことをようく言っておいてね、分かった？　アナがまたすすり泣く、彼もバトゥケが殺されるのじゃあないかと心配になった。
「別にどうもされないよ」彼がアナの頬に口づけすると、一瞬、生肉と塩の味がする。「すぐに連れて帰るから、まあ、見てな」
サンティアーゴは、ポルタ通りとサン・マルティン通りが交わる角にある薬局まで急ぎ足で行き、電話を借りて「ラ・クロニカ」社にかける。司法記者のソロルサノが出

る、野犬収容所がどこにあるかなんて知ってるわけないだろう、サバリータ。
「お宅の犬が連れて行かれたんですか？」と薬剤師が好奇心に満ちた顔を突きだす。「野犬収容所ならプエンテ・デル・エヘルシトの近くです。急いで行った方がいいですよ、私の義兄なんか、とても高価なチワワを殺されてしまいましたからね」
　サンティアーゴはラルコまで急いで行ってタクシーに乗る。パセオ・コロンからプエンテ・デル・エヘルシトまで幾ら位かかるかな？　財布の中身を数えると百八十ソルある。日躍日にはもう一銭も残っていないだろうな、アナが病院をやめたのは惜しいことをした、あの晩二人で映画に行かなければ良かった、かわいそうなパトゥケ、もう狂犬病に関する論説なんてご免だ。彼はパセオ・コロンでおりてボロネージ広場でタクシーをつかまえる、運転手は野犬収容所がどこにあるか知らない。プラサ・ドス・デ・マヨのアイスクリーム売りが彼等に道を教える、もう少し先へ行くと川の近くに小さな看板が出ているよ、市立野犬収容所、というのがそうさ。一方がウンコ色――リマの色だな、と彼は考える、ペルーの色だ――の日乾し煉瓦のくずれた壁で仕切られた大きな空地がある、その両側面には掘立小屋が立ち並んでいるが、それらは遠くの方では混じり合い重なり合って、遂にはムシロやタイルやトタンの迷路と化している。押しころされた遠くのうなり声。入口の近くに汚らしい建物が立っていて、標札に事務所とある。ワイシャツをまくりあげて眼鏡をかけた禿頭の男が、書類で一杯の事務机でうとうとしているので、サンティアーゴが机を叩く、俺の犬が奪われてしまったんだ、女房の手からひったくられてしまったんだぞ、男はびっくりしてうなりながら身体を起こす、畜生め、ただじゃあ済まさんぞ。
「畜生って言いながら事務所に入ってくるとは何だい」禿頭がきょとんとした眼をこすって、しかめ面をする。「もっと敬意を表して貰いたいね」
「もしも俺の犬がどうかなっていたら、話はただじゃあ済まないぞ」サンティアーゴは記者証をとりだして、もう一度机を叩く。「そして俺の女房を襲った奴らにたっぷり後悔させてやるからな」
「もう少し静かにしてくれないかね」男は記者証を調べ、欠伸をする、顔の不快な表情が融けて幸福に輝く退屈な面持ちになる。「あんたの犬は二時間前につかまえられたんだね？　それじゃあ、今トラックが運んできた奴のなかにいるだろう」
　記者さん、そんなふうにはとらないで貰いたいね、これは誰のせいでもないんだから。男の声は気が無さそうで、その眼みたいに睡たげで、口の皺のように不愉快である。こいつも駄目になってやがる。捕獲人には一匹当り幾らで金が払われるのでね、時どきやり過ぎるんでさあ、だって、仕様がないでしょう、フリホール豆（隠元豆に似た豆で、中南米では下層階級の主食とされ

る所が多い）を手に入れるための戦いなんだから。空地で聞こえる鈍い打撃音と、コルクの壁を通して洩れてくるほえ声。禿頭は中途半端な微笑を浮かべ、品のない、厭いやながらの様子で立ちあがり、何やらつぶやきながら事務所から出て行く。彼等は空地を横切って小便臭い小屋のなかに入る。平行して並べられている檻、そのなかに詰めこまれている動物たちは、互いに身体をこすり合わせ、跳びあがり、金網を嗅いでうなっている。サンティアーゴは一つ一つの檻の前で身をかがめる、あれじゃあない、彼は鼻面と、背中と、ぴんと張られて揺れる尻尾が作りだす、ごたまぜの表面を調べる、ここにもいない。禿頭は、あらぬ方面に眼をやり足を曳きずりながら、サンティアーゴと並んで歩く。

「よく見て下さいよ、犬を入れる所はこれしきゃあないんだから」禿頭が急に文句を言う。「それなのにお宅の新聞はわれわれを叩くんだからね、まったくひどい話だよ。市当局は何もしてくれないので、われわれは奇跡を演じなければならないんですぜ」

「畜生」とサンティアーゴは言う。「ここにもいない」

「まあ落着きなすって」禿頭が溜め息をつく。「小屋はまだ四つあるから」

彼等は再び外に出る。掘り起こされた土地。雑草、糞、臭い水溜り。二番目に入った小屋で、一つの檻がほかの檻よりもせわしい動きを見せ、金網がゆれ動き、何やら毛の多い白い物が上下し、波間の上に出たり沈んだりしている。よく似ているな、まあまあといったところだ。鼻の半分と、尻尾の一部と、泣いたような赤い眼、バトゥケだ。犬はまだ鎖をつけていた、連中には権利がなかった筈だ、なんていう奴らだ、しかし禿頭は、まあまあ、落着いて下さいよ、彼はこれから犬を出させるところだった。悠長な足どりで遠ざかって行くと、じきに青いオーバーオールを着こんだ背の低いサンボ（黒人とインディオの混血）を従えて戻ってくる。おい、パンクラス、あの白っぽい犬を出してやれ。サンボが檻を開け、動物たちをかき分け、バトゥケの首筋をつかまえ、それをサンティアーゴに渡す。かわいそうに犬は震えていた、だがサンティアーゴが手を離すと、そいつは一歩後ずさりして身体を震わせた。

「奴らはきまって洩らすんだ」とサンボが笑う。「それが獄から出られて嬉しいという奴さんたちの表現法なのさ」

サンティアーゴはバトゥケの脇にかがみこんで頭を掻いてやり、両手を差し出して嘗めさせる。バトゥケは身体を震わせ、小便をたらし、酔ったみたいによろめき、空地に出されてはじめて、跳んだり、地面を嗅ぎ回ったり、走ったりしだす。

「私と一緒に来て、われわれがどんな条件の下で働いているかをちょっと見てくれないかね」禿頭がサンティアーゴの腕をつかまえて酸っぱい微笑を向ける。「ひとつお宅の新聞に何か書いて、市当局が予算を増やすように要求して

くださいよ」

悪臭を放つ石ころだらけの小屋、鋼鉄製の灰色の屋根、吹き寄せる湿った空気の風。彼等から五メートルほど離れたところでは、大きな袋の傍らに立った黒っぽい人影が、いちばん小さい身体にしては余りにもすごい声で異議を申し立て、ヒステリックに身をよじっているダックスフントを相手に奮闘している。パンクラス、手伝ってやれよ。背の低いサンボが走って行き、大袋を開けると、もう一人の男がダックスフントをなかに放りこむ。彼等が腹帯で大袋を閉め、それを地面の上におくと、バトゥケがうなりだし、うなりながら鎖を引っ張る、おい、どうしたんだ、サンティアーゴがびっくりした顔でみつめ、バトゥケがしゃがれた声でほえたてる。男たちはもう手に棍棒を持っていて、早くもイチ、ニと殴りつけ、うなりはじめている、それで大袋は、踊ったり、跳ねたり、狂ったようにほえている、男たちはイチ、ニとうなりながら殴り続ける。サンティアーゴは呆然として眼を閉じる。

「ペルーは今でも石器時代なんですよ」甘酸っぱい微笑が禿頭の顔をはっきりさせる。「われわれがどんな条件の下で働いているか、ひとつ見て下さい。いったいこれでいいんですかね？」

大袋が静かになる、男たちはなお暫く殴りつけてから棍棒を地面に投げ捨て、顔を拭いて手をこすり合わせる。

「以前は神様がお望み通りの方法で殺してたんですがね、今じゃあ、金の方が追いつかないんで」禿頭が苦情を言う。

「ちょっとした記事を書いてくれませんかね、記者さん」

「ここの稼ぎがどの位になるかご存じですか？」とパンクラスが言って、もう一人の男の方をふり向く。「お前が話せよ、こちらの旦那は新聞記者なんだ、だから彼の新聞で抗議してくれるように、よく話して聞かせろ」

その男はパンクラスよりも背が高く、もっと若い。彼が皆の方に向かって二、三歩踏みだしたので、サンティアーゴはついにその男の顔を見ることができた。なんていうことだ！　サンティアーゴが鎖をはなしたので、バトゥケがほえながら駆けだす、サンティアーゴは口を開け、そしてまた閉じる、なんていうことだ！

「一匹当り一ソルなんですよ、旦那」とそのサンボが言う。「しかもそのうえ、死骸を焼くために、そいつをゴミ捨て場まで持って行かなくちゃあならないんですから。たったの一ソルですぜ、旦那」

あの男じゃあない、黒人というのは誰でも似ているのだ、あの男である筈がない。サンティアーゴは考える、どうして彼ではありえないのか？　サンボが身をかがめて大袋を持ちあげる、やはりあの男だ、男は袋を空地の隅まで運び、それを血まみれのほかの袋のあいだに放りこむと、長い足の身体をゆすり額をこすりながら戻ってくる。あの男だった、やはり彼だった。おい、お前さん、パンクラスが肘で男を突く、昼飯を食いに行けよ。

「お前らはここでぶつぶつ言ってるけど、トラックで犬を捕まえに出たときにはけっこう調子に乗ってるんだろう」と禿頭がうなる。「今日の午前中なんか、奥さんが鎖をつけて連れていたこちらの犬を捕まえやがって、図々しい野郎だ」

サンボが肩をそびやかす、やはり彼だった、今日の午前中はトラックで出ませんでしたよ、親方、ずうっと棍棒をふるってたんです。サンティアーゴは考える、彼だ。声も身体も彼のものだが、年は三十歳も年上に見える。同じ薄い唇、同じ低い鼻、同じ縮れた毛。しかし今はそれに加えて、瞼に紫色のたるみが、首筋に皺が、馬みたいに大きな歯に緑色がかった黄色い歯石がついている。彼は考える、奴の歯は真白だったのに。なんて変わってしまったんだろう、なんてしょぼくれてしまったんだろう。彼は以前よりも痩せており、もっと汚らしく、はるかに老けこんでいるが、あの大股のゆっくりした歩き方は彼のものだし、あのクモみたいに長い足はあの男の足だ。男の大きな手は節だらけで、口の周囲には唾液の口輪がついている。彼等は空地から事務所にひき返していた、バトゥケはサンティアーゴの足に身体をこすりつけている。彼は考える、あの男は私が誰だか知らない、彼にはそれを教えてやる気がなかった、男に話しかけようともしなかった、どうしてお前だということが分かるだろうか、サバリータ？　あの頃のお前は十七歳？　それとも十八歳？　それが今では三十歳の老人だ。禿頭は二枚の紙のあいだにカーボン紙を入れ、読みにくいちびた書体で何やら二、三行書きなぐる。サンボは側柱によりかかって唇を舐めている。

「ここにサインして下さい、それから、真面目な話ですが、われわれのために力を貸してくれませんかね、『ラ・クロニカ』紙に何か書いて、われわれの予算を増やすように要求してくださいよ」禿頭がサンボの方を見る。「お前は昼食を食いに行かないのか？」

「前借りをお願いできませんか？」彼は一歩前に出てごく自然な調子で説明する。「懐具合がさびしいので」

「じゃあ五ソルだけ」禿頭が欠伸をする。「それしか持ってないのでね」

彼はお札に眼もくれないでそれをしまうと、サンティアーゴと並んで外に出る。トラック、バス、乗用車の川がプエンテ・デル・エヘルシトを横切っている、どんな顔をするだろうか？　霧のなかにフライ・マルティン・デ・ポレスのあばら家の土色のかたまりが、逃げだすだろうか？　夢の一部のように見える。彼がサンボの眼を見ると相手も彼を見る。

「もしも犬が殺されていたら、俺もみんなを殺してたと思うな」彼は微笑しようとする。

いや、サバリータ、サンボはまだお前が誰だか分かっていないんだ。男は注意深く耳を傾けているが、その眼つきにはあいまいさと、よそよそしさと、敬意が浮かんでいる。

年をとったうえに、たぶん心もすさんでしまったんだろう。彼は考える、こいつも駄目になっている。

「この毛むくじゃらが今朝捕まえられたんですか？」男の眼が一瞬、不意にぱっと輝く。「きっとサンボのセスペデスの奴でしょう、あいつときたら何一つ構いやしないんだから。庭に入りこむわ、鎖を壊すわ、一ソルさえ稼げればどんなことだってやるんですからね」

彼等はアルフォンソ・ウガルテへ通じる階段の登り口にいる。バトゥケは地面の上をころがり回り、灰色の空に向かってほえている。

「アンブローシオだろう？」彼は頬笑み、ためらい、また頬笑む。「お前はアンブローシオじゃあないのかね？」

男は駆けださない、何も言わない。茫然として痴呆みたいな表情で見つめているが、突然、その眼に一種のめまいが起きる。

「ぼくを忘れてしまったのかい？」彼はためらい、頬笑み、再びためらう。「サンティアーゴだよ、フェルミンの息子の」

大きな二つの手が上に伸びる、サンティアーゴ坊ちゃんだって？　その手はあたかも彼を締め殺すか抱擁するかを決めかねているみたいに、空中でじっとしている、ドン・フェルミンの坊ちゃんだって？　その声は驚きのためか感動のために割れており、眼は見えなくなってまばたきしている。その通りさ。彼にはサンティアーゴが分からなかったんだろうか？　それとは反対にサンティアーゴの方は、空地で彼を見た時すぐに彼だと分かったのだった。なんて言うつもりだったのか？　大きな両手の動きが活潑になる、ああ畜生め、その手がまた空中を旅して、実際、彼はすっかり大きくなってしまっていた、サンティアーゴの肩や背中を軽く叩き、とうとう眼が笑う、坊ちゃん、いゃあ、嬉しい。

「大人になったあんたを見るなんて嘘みたいだ」彼はサンティアーゴに触れ、見つめ、頬笑みかける。「こうやって見ていても信じられませんよ、坊ちゃん、もちろん、今はあんただっていうことは分かってるけど。お父さんそっくりだ、ソイラ奥様にも少し似てらっしゃるが」

で、テテ嬢ちゃんは？　大きな手が行ったり来たりする、感動のあまり？　それとも驚きのあまり？　で、チスパスさんは？　彼の手はサンティアーゴの腕から肩へ、そして背中へと動き、その眼は優しく回想的で、声は努めて自然を装っている。不思議な偶然じゃあなかったろうか？　彼等がまた顔を合わせるなんて！　しかもこんなに時間が経ってから、ああ畜生め。

「このいざこざのお陰で喉が乾いてしまった」とサンティアーゴは言う。「さあ、何か飲みに行こう。このあたりにどこか知ってる店があるかね？」

「私が食べに行くところがありますがね」とアンブローシオが言う。「〈ラ・カテドラル〉というんですが、貧乏人相

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.